

36. 当科における NASH (非アルコール性脂肪肝炎) の臨床的検討

内科学 (消化器)

中野正和, 室久俊光, 有坂高洋, 星野 敦, 紀 仁, 金子仁人, 秋間 崇, 菅谷武史, 大木 了, 眞島雄一, 小嶋和夫, 飯島 誠, 平石秀幸

【目的】当科で診断された NASH, NAFLD における臨床的特徴について検討した。

【対象・方法】1991年3月から2009年2月までの間に当科で施行された肝生検は1498例で、NAFLDとなる対象は41例であった。肝生検を施行したNAFLD41例のうち27例(65.9%)をBruntの分類によりNASHと診断した。NASHおよびSSの血液検査、身体所見、NASH診断のスコアリングシステム、生活習慣病合併の有無、既往歴について検討した。

【結果】NASHと診断した27例の男女比は13:14であった。単純性脂肪肝 (simple steatosis, 以下SS) と診断した14例の男女比は10:4であった。今回の検討項目ではNASHとSSに有意差は認めなかった。NASHの軽度線維化例と線維化進展例の比較では、血小板数、PT、NAFLD fibrosis score (NFS) で有意差を認めた。SSとNASH線維化進展例の比較では、年齢、AST-PLT Ratio index (APRI)、NFS、CHE、Alb、ZTTで有意差を認めた。

【結論】NAFLDと診断された症例のうち、血小板減少例やPT低下例、NFS高値、APRI高値、CHE低値、Alb低値、ZTT高値の症例はNASH線維化進展例が疑われるため、肝生検による確定診断が必要である。